

第三章 機械(p.147-211)

『クラフツマン 作ることは考えることである』

リチャード・セネット著, 高橋勇夫訳, 筑摩書房(2016)

報告者: ぱんこ

機械化(p.147, l.1-p.148, l.3)

- 近代のクラフツマンが直面している最大のジレンマは機械である。それは人間の見方をしてくれる道具なのだろうか？それとも人間の手に取って代わる敵対的な仕掛けなのだろうか？(p.147, l.1-2)
- 私たちは、まさに私たちが相対的に不完全な存在であるという現実うちに、人間であることについて何かポジティブなものを学ぶことができるのではないだろうか？(p.148, l.1-3)

機械による豊かさと不安(p.148, l.4-p.150, l.15)

- 15世紀には、ヨーロッパは有り余るほどの新しい物質財貨に満ちていた。(p.148, l.7-8)
- 近代の幕開け以来、自分の自由になる物質的豊かさに対する人々の反応の多くは「不安」だった(p.149, l.4-5)
- 18世紀における機械の登場はこの豊かさを加速させただけ(p.149, l.15)
→18世紀は機械生産による豊かさの美点を受け入れたのであり、また現代の私たちもそうしているはずである。(p.150, l.2-3)

人間的なものへの認識の深まり(p.151, l.1-p.152, l.14)

- 慎み(リストレイント)と質素(シンプリシティ)という人間的美德が、人類文化への人間の貢献として、注目されるように(p.151, l.3-4)
→職人気質(クラフツマンシップ)に特別な関心が寄せられる(p.151, l.5)
=「機械による豊かさ」と「人間的節度」の仲立ちをするもの(p.151, l.6)
- クラフツマンの新たな転機(p.151, l.7)
=実践によって伝える知識(ハンズ・オン・ナリッジ=暗黙知)から、支配的権威としての明示知(エクспリシット・ナリッジ)への移行(p.151, l.13-14)
- 今や、機械の厳格なる完全性に対抗して、クラフツマンは人間的個性の象徴になったのである。(p.152, l.4-5)
→手仕事(ハンドワーク)による差異(バリエーション)、あら(フロー)、不規則(イレギュレーション)などを積極的に評価(p.152, l.5-7)
- 文化的には、今なお私たちは、機械的なものと比較しながら自分自身の限界を前向きに理解しようと苦悩している。社会的には、今なお私たちは、反-テクノロジー主義を相手に苦闘している。それらの問題の中心にあるのは、いまだに技能仕事(クラフトワーク)なのである。(p.152, l.11-14)

鏡となる道具(ミラー・ツール)—人造人間(レプリカント)とロボット

人間的なものの模倣と拡大(p.153, l.1-p.155)

- ミラー・ツール=自分自身について考えるように私たちを促す道具(p.153, l.1)
=レプリカント(人間の模倣)とロボット(人間の拡張)(p.153, l.2)

人間を模倣するヴォーカンソンの「笛吹き」(p.155, l.1-p.156)

- つまりその動作は、人間が音楽を奏するときの基準で評価することができた(p.156, l.11)

人間を駆逐するヴォーカンソンの機織(p.157, l.1-p.158)

- 先のレプリカントをも元にして作られたのは、ロボット(p.157, l.1)
- 「笛吹き」は「人間を愉しませるために作られた」のに、リヨンのヴォーカンソンの機織は「人間が不要であることを示すために作られた」(p.158, l.5-6)
- 人間の限界というネガティブで不吉な物語を教えてくれたのは、レプリカントではなく、ロボットだった(p.158, l.12-13)

啓蒙されたクラフツマン—デイドロの百科事典

自信に満ちた理性(p.159-p.160, l.8)

- 「啓蒙運動」=enlightenment
- 「啓蒙運動」は、社会の風習(マナーズ)や道徳観(モーレス)に対して理性の光を投げかける過程だと理解され、18世紀のスローガンになった(今日のアンデンティティのようなもの)。(p.159, l.5-6)

改良される精神(p.160-p.161, l.14)

- カント
 - 推論の自由は、幼稚な核心を脱ぎ捨て、精神を改良する(p.161, l.1-2)
 - 自由な精神とは、常にそれ自身の規制と規範を批判的判断に委ね、それゆえそれらを変更するもの(p.161, l.9-10)
 - カントの関心の中心は、秩序を構想することではなく、秩序について判断し反省すること(p.161, l.11-12)
 - すると、自由な理性は無秩序へ墮落しかねないということなのだろうか？(p.161, l.13)

唯物論的啓蒙運動(p.161, l.15- p.163)

- メンデルスゾーン:「教養=文化+啓蒙」(p.162, l.9)

- 日常の「したりしなかつたりする事柄」(実際の文化)はいかなる抽象的事柄にも劣らず価値があると信じ、それを理性的に思案することで私たちは自分自身を改良する(p.162, l.12-14)
- 「教養=文化+啓蒙」はデイドロが中心となって編集した『百科全書』を純化したものだった(p.162, l.16-18)
- フランス思想家による『百科全書』
→日々の労働の実践が中心。啓蒙運動の象徴としてのクラフツマン。(p.163, l.5-8)

肉体労働を精神労働と対等視(p.165, l.5-p.166, l.8)

- 手作業的=肉体的な仕事を精神労働と同等の足場の上に据えることによって、クラフツマンを啓蒙運動の象徴とする(p.165, l.8-9)
- 伝統的特権に対する攻撃において、自由な理性ではなく有用な労働が過去に挑戦するということ(p.166, l.2)

有用性(p.166, l.9-p.167, l.1)

- 社会的に劣等と見なされている人々の活力を称賛した(p.166, l.16)

共感力と想像力(p.167)

- 感情移入=共感(シンパシー)は、単に他者を自分自身になぞらえて考えるのではなく、あらゆる相違を意識したまま、自分自身を他者として想像することを意味した(p.167, l.11-12)

良い仕事と日常品への共感(p.168-p.170, l.3)

- 『百科全書』の図解は、読者によくできた日常品に対する満足感が支配する領域に踏み入るよう訴えかけている(p.169, l.7-8)

言葉の限界(p.170, l.4-p.172, l.1)

- 職人的技能にはある技術と知識との領域が確立されていて、それはおそらく人間の言葉では説明できない(p.171, l.12-13)
- つまり言語は、人間の身体の動作にとって恰好な「ミラー・ツール」とは言えない、ということである(p.171, l.15-16)

写真的方法—視覚による思考(p.172)

- 言語の限界に対する一つの解決策は、言語に代えてイメージを用いること(p.172, l.1)
- クラフツマンについては、語るのではなく見せることによって啓蒙する象徴的人物(p.172, l.12-13)

発見的学習(行うことによって学ぶ)—「改良」の限界(p.173-p.175, l.8)

- 言語の限界は積極的に実践に携わることで克服される、というもの(p.173, l.1)

- 「説明するのが難しい機械や、あまりに捉えどころのない技術があるものだから、そうした機会を掴んで、実際に動かし、自分の手で作業をやってみないといけないことがよくあった」(p.173, l.3-5)
- 「発見的学習」は、実践する人間の能力という問題を惹起し、その結果として、現実の仕事にこなすための能力が十分ではないために、ほとんど学習効果が上がらないかもしれないという問題も発生させる(p.173, l.10-13)
- 試行錯誤は非常に有用な実験的方法(p.174, l.1)
- 発見的学習(ラーニング・バイ・ドゥーイング)は、進歩主義教育という点ではすこぶる快適な妙案であったが、実際は残酷な処方箋なのかもしれない。クラフツマンの作業場は、もしそれが私たちに無能さを噛みしめさせる場所だとするなら、なるほど残酷な学校ではあるだろう。(p.174, l.14-18)
- 良い仕事を積極的に追求して、それができないと判った時、自尊心は蝕まれてしまう(p.175, l.7)

「有益な失敗」(p.175, l.9-p.176)

- 貴族的特権を保持したいばかりに、才能による競争の敗者の運命を軽視しがちであった(p.176, l.1)
- 凡庸な敗者の失敗は「有益な失敗」になりうる(p.176, l.4)

製紙—人間と機械の協力(p.177-p.179, l.6)

- 製紙=人間とロボットが協力し合うことで、クラフトが改良されていく様子(p.177, l.11)

ガラス作り—人間を超える機械(p.179, l.6-p.181, l.14)

- ガラス工は機械の模倣をすることができない(p.181, l.9)

規範と革新(p.181, l.20-p.182, l.6)

- 全体的な問題は、私たちは何を持って模範(モデル)の目的と考えるかという点にある(p.181, l.22-p.182, l.1)
- 模範(モデル)とは、命令ではなく、提案である。優秀な模範が促すのは、模倣(イミテート)することではなく、革新(イノヴェート)することなのである(p.182, l.4-7)

子育てのクラフト(p.181, l.7-p.183)

- ルソー:それぞれの親は自分なりのやり方で、手本とすべきモデルとして振る舞うべきなのである(p.183, l.7-8)

提案としての模倣(p.184-185, l.6)

- ルイーゼ・デビネ:より良い親のアドバイスは、「私のようになりなさい」と伝えるのではなく、もっと間接的でなければならない(p.184, l.12-13)

- こうしたアドバイスは「だから君も...すべきだ」を省略している。君自身の道を見つけなさい。すなわち模倣するのではなく、革新(イノベート)しなさい、ということだ(p.184, l.13-15)
- 親のように、規格(マシン)化された対象は、何かをするときの、その仕方について「提案」をしているのだ。そして私たちは、その提案に服従するのではなく、それについてじっくり考えをめぐらす。かくして模範(モデル)は、命令ではなく、刺激(スティミュラス)になるのである(p.185, l.4-7)

「完璧性」という模倣の革新(p.185, l.7-p.188)

- 完璧なる仕事は、違った種類の結果を目指す別なタイプの労働のための、引き立て役として奉仕すべきなのである。結果として啓蒙されたクラフツマンは、ルネサンスが芸術的天才を祝福したのとは全く別のルートを辿って、個性(インディビジュアリティ)を祝福し、実現することができた。しかしその道を行くためには...彼は自分自身のうちに不完全性を受け入れていなければならなかった(p.188, l.1-6)

啓蒙運動の意味(p.189-190)

- 啓蒙された機械の使用法とは、機械の潜在能力(ポテンシャル)ではなく私たち自身の限界という観点から、その力を判断し、その使い道を考え出すことである。私たちは機械と競争するべきではない。あらゆる模範(モデル)と同様、機械は、命令するのではなく提案するべきであり、そして人間は、完璧さを模倣せよという命令から確実に遠ざかるべきである。完璧さの要求に対抗して、私たちは私たちの個性を強調できるし、それは私たちが行う仕事に独自の性格を与える。クラフツマンシップにおいてその種の性格を実現するためには、謙遜(モデスティ)と私たち自身が力不足であることの自覚が必要である。(p.190, l.7-12)

ロマンティックなクラフツマン—ジョン・ラスキンが近代世界と闘う

クラフツマンの闘い(p.191-192)

- 19世紀の鉄鋼業界の熟練工が潜在的未来として直面したもの
→脱—熟練(デスキリング)単純作業化、もしくは解雇(p.192, l.3)

機械による支配(p.193)

- 技能労働者たちは、三つの前線で、科学技術の変化と闘ってきた。すなわち、雇用主、彼らの仕事を奪う未熟練労働者、機械である(p.193, l.1-3)
- 熟練工たちは、近代産業の中で、機械と共存し、機械の中で生き抜いてはいるが、機会を作り出すことは滅多にない、隠して科学技術の進歩は、他社による支配と不可分のもののように思われてくるのである。(p.193, l.10-13)

ラスキン—機械に対する反抗と身体感覚の擁護(p.194-195)

- ラスキン→機械文明という考えそのものを軽蔑するように読者に訴えた(p.194, l.3)

感觸の減退—画一化された量への不安 (p.196-198, l.5)

- 機械は量と質の關係に新しい要素を導入した。画一化された品物の純然たる数量そのものが、初めて、数は感覺を鈍化させ、機械製品の画一的な完璧性は共感を誘わず、個人的反應を呼び起こさないのではないか、という不安を掻き立てたのである (p.196, l.6-9)
- 質と量の逆相關係＝「浪費」(p.196, l.10)

大博覽会—大きさ(機械力)の誇示 (p.198, l.6-p.200, l.8)

- 鋼鉄ロボット、必要以上のパワーを与えられた自動車のエートスは「大きいけれど何の目的も持たない」(p.200, l.5-7)

困難と危機から生まれる発見 (p.201, l.14-p.203, l.7)

- ラスキンの「人にまっすぐな線を引くことを教えることはできる。... やがて彼の仕事ぶりはその種のものとして完璧になるだろう。しかしここで彼に、それらの形のいずれかについて考えるように、またもっとできのよいものがないかどうか彼自身の頭で考えるように頼むと、彼は立ち往生してしまう。...彼は考える、そして十中八九、間違ってしまうのだ。」(p.202, l.11-16)
- 近代のクラフツマンはこの設計技師を手本と仰ぐべき (p.203, l.6)

ラスキンの七つの指針 (p.203, l.8-p.205, l.2)

- ラスキンは、産業時代の過酷さは「自由な実験」と「有益な失敗」の経験に対して阻害的な働きをすると信じていた (p.204, l.14)

ロマン主義的巨匠—アマチュアの差別化 (p.206, l.3-p.208, l.4)

- 18世紀半ば→宮廷では実演者と観客、技術的な精通者とアマチュアの境界線は不鮮明だった (p.207, l.6-7)
- 1850年代までには、音楽の巨匠に...聴衆の中のアマチュア演奏家たちは気後れを感じ...観客は沈黙し、身じろぎすらなくなる (p.207, l.17-p.208, l.3)

ロマン主義的巨匠と機械 (p.208, l.5-p.209, l.7)

- つまり、機会を用いる巨匠的技術は、いつでもどこでも、不人情(インヒューマンメイン)なものだというのである。(p.208, l.6-7)

手作りの美德 (p.209, l.8-p.211)

- ミルズ「クラフツマンシップは時代錯誤」(p.210, l.15)
- クラフツマンシップについての啓蒙された考え方と、ロマン主義的な考え方を比較した場合、私たちはいずれの考え方を採用すべきなのか。(p.211, l.1-3)
- 筆者は啓蒙; 機械と闘うことではなく、機械とともに働くことが、ラディカルで開放的な挑戦だったからである。(p.211, l.4-5)

